

コメニウスと日本人の出会い

— ゴンザ以前のエピソードをさかのぼる —

教育学科 相馬 伸一

抄録

チェコ17世紀の思想家ヨハネス・コメニウスと日本人との出会いは、これまでのところ、漂流民ゴンザが18世紀前半にロシアでコメニウスの教科書を翻訳したのが最初であると考えられている。本論文は、ゴンザ以前のエピソードの検討に関する中間報告である。コメニウスの友人ヨーン・ヨンストンとコメニウスの論敵であるロデウィク・マイエルの著作は日本で受け入れられ、蘭学と洋学の発展にかなり貢献したのに対して、ゴンザに先立つ記録は見出されなかった。これは、コメニウスのテキストにとって近世日本の文化的障壁がやはり険しかったことを示唆している。未発掘の史料に対する調査の進展が期待されるとともに、コメニウスのテキストに関連する情況証拠や間接的影響が考察される必要がある。

Key Words : コメニウス, ヨンストン, マイエル, 西洋受容, 近世日本

はじめに

本稿の課題は、日本人が17世紀チェコの思想家コメニウス (Johannes Amos Comenius, チェコ語表記では, Jan Ámos Komenský, 1592-1670) の文献に触れた歴史的起点を再考するための課題を整理することである。

コメニウスは、「遅れて来たルネサンスの普遍人」ともいべき広範な活動を行ったが、亡命の人生を歩み、その思想的主張が啓蒙主義本流とは折り合わない部分があったこともあってか、その死後、彼の残した多くの優れた教科書は使用され続ける一方で、思想家としては忘れられたに近い状態が続いた。しかし、18世紀後半以降、ヨーロッパにおける国民国家形成の実現の手段として国民教育が重視され、教員養成

の制度化が模索されるようになるなかで、近代的教育構想を先取りして論じた思想家と見なされるようになり、教員養成カリキュラムにおいて重要な位置を与えられた教育(思想)史で、不可欠の群像として詳しくとりあげられるようになった。このため、コメニウスは他の分野に比して、圧倒的に教育学でとりあげられるようになった。日本においても、義務教育制度の確立が模索されるなか、明治前期にアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスの教育史の教科書が次々と翻訳され、コメニウスがそのなかで知られるようになったのは事実である。

しかし、コメニウスのテキストと日本人との出会いは、現在までの研究が明らかにするところでは、江戸時代の享保年間における薩摩(現、鹿児島)出身のゴンザなる人物にまで遡

られる。ゴンザをめぐる、漂流民をめぐる歴史研究や言語学の研究で多くの検討がなされており、ここでは簡潔に触れるにとどめる¹⁾。

1728年末、薩摩から出航した「わかしお丸」という船が難破し、7か月近い漂流の末、カムチャツカ半島に漂着した。しかし、船員たちはロシア人のコサック隊に襲われ、生き残ったのは年長のソウザ (1693-1736) と少年だったゴンザ (1718-1739) の2名であった。その後、二人は、首都のペテルブルク (現、サンクトペテルブルク) に連行され、皇帝アンナ・ヨアノヴナ (Anna Ioannovna, ロシア語表記: Анна Иоанновна, 1693-1740) に謁見した。この時点で、ゴンザはロシア語をかなり話すことができたという。そして、正教会の洗礼を受けロシア名も得て、ロシア科学アカデミーに設けられた日本語学校で、同図書館の司書補アンドレイ・イワノヴィチ・ボグダーノフ (Andrei Ivanovich Bogdanov, ロシア語表記: Андрей Иванович Богданов, 1692-1766) のもと、日本語教師となった。ソウザは学校ができた年に死去するが、ゴンザはその後3年を生き、6つの著作を残した。最も知られているのは、およそ12,000語を収めた世界最初の露和辞典『新スラヴ・日本語辞典』(Новый лексикон славено-японский) だが、このほかコメニウスが著した教科書『開かれた言語の扉の前庭』(*Januae linguarum reserata aureae vestibulum*, 1633) をもとにした『日本語会話入門』(*Преддверие разговоров японского языка*, 1736) と『世界図絵』(*Orbis Sensualium Pictus*) のロシア語と日本語の対訳版を著したのである。いずれも、ゴンザが話した日本語の薩摩方言をもとに書かれており、そのため、日本語の教科書としての通用性には問題があったと思われるが、逆に当時の薩摩方言についての第一級の史料となっている。

ゴンザの出身地については、彼の残した著作

の言語学的特徴から、始良市、薩摩川内市、いちき串木野市といった諸説が提起されているが、2011年、いちき串木野市の羽島崎神社境内にゴンザ神社とゴンザ像が設けられた。ここは、1865年に秘密裏に五代友厚 (1836-1885) らの19人の薩摩藩士がイギリスに出発した海岸 (現在は、薩摩藩英国留学生記念館がある) にもほど近い。

しかし、ゴンザ以前に、日本人がコメニウスを知った事実はなかったのだろうか。いわゆる鎖国体制の完成のもと、日本にとっての西洋の窓はオランダであった。コメニウスは1656年からその死の1670年までアムステルダムに居住し、その間、『教授学著作全集』(*Opera didactica omnia*) をはじめとした多くの著作がオランダで出版された。彼が1631年に著した語学教科書『開かれた言語の扉』(*Janua linguarum reserata*) は画期的な成功を収めて

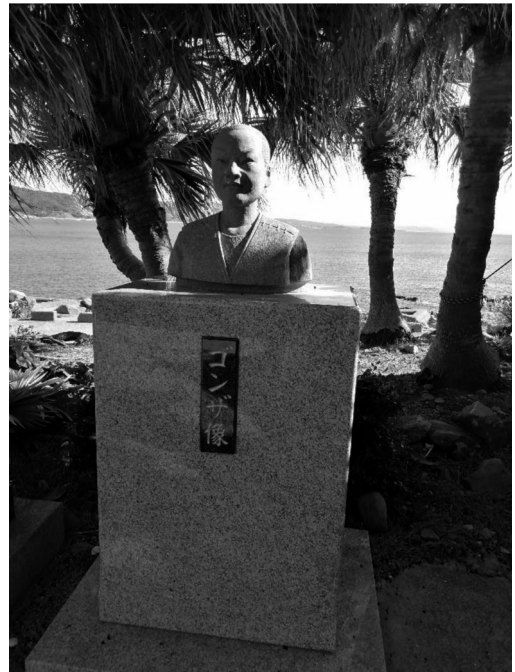


写真1 羽島崎神社境内のゴンザ像
(筆者撮影)

各国語に翻訳され、さらに1658年に出版された『世界図絵』は初めての絵入り教科書として彼の名を不朽のもとにした。語学の習得が西洋事情の把握の前提であったことからすれば、著名な語学教育者であるコメニウスの著作が日本に流入し、日本人の目に留まったとしても不思議ではない。

しかしながら、本稿の段階では、通説を書き換えるような事実が見出されているわけではない。しかし、皮相的に否定的に見える事実は、しばしば未解明の文脈があることを示唆しているものである。本稿では、今後の本格的な検討に向けた課題を整理する。

17世紀オランダにおける日本についての情報源

コメニウス著作の日本への流入について検討する前に、コメニウスが当時の日本について知る環境はどうであったか、そして実際に日本および日本人をどのようにとらえていたかをおさえておこう。アムステルダムのコメニウスが日本について一定の情報を得られたのではないかと想像できるいくつかの事実がある。

オランダ東インド会社のバタヴィア商務総監、のちにはフランス東インド会社長官を務めたフランソワ・カロン (François Caron, 1600-1673) は、1619年に平戸オランダ商館に赴任し、日本人と結婚して子どもももうけて、第8代館長にのぼりつめ、7回にわたって江戸に参府した。1636年には日本に関する報告書をオランダ東インド会社総督に提出し、これは1648年に『日本大王国志』(*Beschrijvinghe van het machtigh Coninckrijk Japan*)としてアムステルダムで出版され、1661年カロン自身の校訂と挿絵が加えられて再版され、その後、ドイツ語、フランス語、英語等に翻訳されて普及した²⁾。1649年には、近代地理学の祖と称されるベルンハルドゥス・ヴァレニウス (Bernhardus

Varenius, 1622-1650) が、イエズス会士の情報や『日本大王国志』をもとに、アムステルダムのエルゼビア社の世界地理学シリーズのアジア部第2巻として、『日本国誌』(*Descriptio Regni Japoniae*)を著した [フレデリック2020: 150]。

コメニウスの死去の1年前の1669年には、オランダのカルヴァン派牧師で歴史家のアルノルドゥス・モンタヌス (Arnoldus Montanus, 1625-1683) による、『東インド会社遣日使節紀行』(*Gedenkwaardige Gesantschappen der Oost-Indische Maetschappy aen de Kaisaren van Japan*) が出ている³⁾。オランダ語で出版された同書は、本文456ページという大著にもかかわらず、早い段階で版を重ね、同年のうちにドイツ語版、翌年には英語版とフランス語版が出た。この書物には、モンタヌスによる想像も多く含まれているが、日本とヨーロッパの交流の経緯、キリスト教への弾圧、日本の宗教事情について書かれている。

ところで、コメニウスに関連して、別にモンタヌスという人物がいる。ペトルス・モンタヌス (Petrus Montanus, Pieter van den Berghe, 1631-1706) はアムステルダムの印刷業者で、コメニウスの『運命の制作者または自己養生の技法』(*Faber fortunæ sive Ars consulendi sibi ipsi*, 1657)、戯曲『甦るディオゲネス・キニク』(*Diogenes Cynicus redivivus*, 1658)、戯曲『太祖アブラハム』(*Abrahamus patriarcha*, 1661) を出版している⁴⁾。1661年にコメニウスが彼に宛てた書簡は、コメニウス自身による諸著作の位置づけ、果たせなかった構想、そして人生の回想を含んでいる点で重要である⁵⁾。

『東インド会社遣日使節紀行』の著者のアルノルドゥスの従兄弟にはコメニウス著作の出版に携わったのと同名のペトルス・モンタヌスがいるが、アムステルダム大学のデータベース ECARTICO によれば、生年は同じ1631年だが

没年が1679年で、残念ながら別人であった⁶⁾。それにしても、晩年のコメニウスが日本について一定の情報を得ることができる環境にあったことは疑いない。こうした書物に限らず、当時のオランダでは日本の磁器や着物が珍重されており、日本および日本人はアムステルダム市民の話題の種であった。

コメニウスによる日本への言及

さて、コメニウスの主要なテキストに限っても、多くはないものの日本についての言及がある。

コメニウス後半生の主著『人間に関わる事柄の改善についての総合的熟議』(*De rerum humanarum emendatione consultatio catholica*)の第6部『パンオルトシア』(*Panorthosia*)では、学問・政治・宗教にわたる総体的な改善について考察されているが、その第25章に次のような記述がある。

「次に、歓喜躍如乱舞して、私たちから隣のアジア人に移ることにしよう。私たちは彼らからキリストと救いを受け取ったのだから。ヤフェトはセムから。またアジア人の大部分はすでにキリスト教に馴染んでおり、あるいはキリストの話を知らないわけではない。彼らに近づくのも容易である。トルコやペルシアやインドや中国や日本を通して交易しているからだ。

そこから南に向かってアフリカに急ごう。彼らははさほど遠く離されているわけではないし、多くのキリスト教徒が混じっている。」[コメニウス 2020: 451]

コメニウスは、『パンオルトシア』で、学問、政治、宗教の改革に関わる3つの国際会議を提唱したが、それらを包括した世界総会ないしは公会議があるべきだと考え、それを世界に周知すべきだと論じた。日本が言及されているのはその下りである。当時、イエズス会による世界宣教が活発に行われていたが、熱烈なキリスト

者であるコメニウスもまた、宗教的熱情に基づく世界の改善を構想していた。

もうひとつ日本についての言及が見られるのは、1667年に出版された『平和の天使』(*Angelus pacis*)である。1664年、第二次英蘭戦争が勃発し1667年まで続くが、プロテスタント国どうしの対立に胸を痛めたコメニウスは、老身をおして講和会議が行われていたブレダを訪れた。同書は講和会議に提出された覚書だが、コメニウスは、ここで宗教戦争を含むあらゆる戦争を否定した。他方、同書には予言信仰にもとづく主張も含まれている。ムスリムの脅威に対してキリスト教圏が団結すべきという大義から、オランダとイギリスの仲介にフランスが期待されるという記述もあるが、すでにヨーロッパの主要諸国が植民地獲得競争に乗り出したなかで現実的なものではなかった。

『平和の天使』には、植民地獲得に狂奔するヨーロッパ諸国に対する次のような警告が記されている(20節)。

「もしもこれほど恐ろしい戦争の原因が(信じられている通り)海外の国民の所に行く航海と、またそれに伴う商品や儲けとに関わる、相互間の先取権競争と先取権熱であるとするなら、醜さや危険がますます増大することになりましょう。なぜなら、キリスト者の諸国民が(しかも、実際に、道徳、思慮、宗教心をかくも啓発された国民でありながら)自分たちの間でこれほど情容赦なくこの世の事柄のために大騒ぎをしているからです。」[コメニウス 1994: 57 読みやすさのため、一部表記を改めた]

コメニウスの立場は、やはり当時のキリスト者に広く見られた伝道熱に支えられていた。ゆえに、オランダやイギリスへの批判も、宗教を脇に置いた経済優先主義に向けられている。38節には次のように記されている。

「同じ信仰の仲間、他の土地にいるキリストの受難の仲間が(すべての者が忠告をしたり

武力を出したりしたわけではなくとも、モーセを模倣して、「出エジプト記」第17章第11節に見られる通り、神に対して願ったり嘆息したりして) あなた方の父祖の勝利を推進するように促したのです。それなのに、またもや、あなた方はバビロンの竈で汗を流している者たちを援助することにとりかかっているのでしょうか。またもや、あなた方はあなた方の父祖が体得していた神の認知を、自分の創造主のことを知らない、憐れむべき異教徒たちのレベルまで、熱烈に押し下げる作業にとりかかっているのでしょうか。このことに関して日本であなた方が犯した誤りを歴史家たちが後の人々に語ることになるのであれば、それはあなた方の称賛と結びつくことになるものでしょうか。あるいは、神には、自ら自分のことを見捨てた人間たちを見捨てないようにしなければならないという義務を負わされているものなのでしょうか。自ら自分のことを見捨てるということは戦慄すべきことでしょし、そんなことはやめて神聖なる先祖の神聖なる熱意の道に戻るべきでしょう。そのことを欠くなら、自分のものにしろ他人のものにしろ、依然として統一した忠告や統一した武力が得られるだろうとあてにしても、無駄になりましょう。」[同 70-71]

「日本であなた方が犯した誤り」とは、キリスト教の布教と通商とを分離したイギリスやオランダのとった政策であり、コメニウスはそれを「憐れむべき異教徒たちのレベルまで、熱烈に押し下げる作業」と断じ、それでは神の加護は得られないと警告したのだった。

こうした主張に対しては、文化相対主義が広く受け入れられている現在からすると、自身の信念を絶対視した一種の文化帝国主義と見なされるかもしれない⁷⁾。しかし、生命の危険を顧みない伝道によって文化と文化のダイナミックな邂逅が開かれたのも事実である。そうしたことは、キリスト教にとどまらず、イスラム教や

仏教にも見られる。伝道的な営為を短絡的に価値絶対主義と決めつけるなら、一見、個々の文化の独自性を擁護するようであっても、実際の文化が葛藤をはらみながらも交流のなかで変容していくという実態を見落とすことになる。コメニウスは、イスラム教徒をいかに改宗させられるかについても考えていたが、それはあくまでも非暴力的な手段によらなければならないと見ていた。日本についても、彼が伝道による教化の対象と見ていたことは間違いない。

コメニウスのオランダ批判の意味

とはいえ、オランダの宗教的なスタンスに対するコメニウス批判には、彼自身に跳ね返ってくる面があるのも事実である。第一に、コメニウスがオランダで比較的平穩な晩年を過ごせたのは、オランダが当時のヨーロッパにおいて、実際には多くの葛藤や対立をはらみながらも、もっとも寛容な社会であったからであった。第二に、当時のオランダ社会の寛容は黄金時代と称される商業の繁栄に支えられたものであり、コメニウス自身もその恩恵に浴していた。

オランダ地域では、スペインによる統治のなかでも北部に多くのプロテスタントが流入し、17世紀にはカルヴァン派が国教とされたものの、宗教改革をうけたカトリックとプロテスタント諸派の相克のなかで生じた多くの難民が受け入れられた。チェコ兄弟教団の最後の主席監督であったコメニウスもその一人である。

オランダに受け入れられたのは宗教者ばかりではない。哲学者のルネ・デカルト(René Descartes, 1596-1650)は、1628年にオランダに移住し、クリスティーナ(Kristina, 1626-1689)の再三の招聘をうけて1649年にスウェーデンに渡るまでを過ごした。この間、ユトレヒト市がデカルト哲学についての出版や議論を禁じたような事例はあったものの、デカルトはオランダでの「孤独な隠れた生活」を享受した。

それから30年ほど後のイギリスの王政復古下、哲学者のジョン・ロック (John Locke, 1632-1704) は1683年から1689年にかけてオランダに亡命し、この間に著したのが『寛容についての書簡』(A Letter Concerning Toleration, 1685) であった。

当時のオランダにおいて微妙な均衡のなかで成立していた寛容の受益者であったコメニウスには、寛容をめぐる試行錯誤が見てとれる。彼は、一方においてキリスト教会間の和解にとりくんだ。

ポーランド滞在中の1645年、コメニウスはポーランドのトルンで開催されたキリスト者の和解のための会議 (Colloquium Charitativum) に参画している。これは国王ヴワディスワフ4世 (Władysław IV Waza, 1595-1648) のイニシアティブによるものだったが、宗派間の対立は深刻で、それに疲弊した彼は、チェコ兄弟教団の代表団の一員を免ずるように求め、会議から離脱した [藤田 2007: 35]。彼は、先に引用した『パンオルトシア』の前半のかなりの部分をさいて、宗教的な和解のための教義や典礼の簡素化を提案しているが、それが受け入れられる余地はなかっただろう。

また、コメニウス自身も、多様な信仰や信念を無条件に許容することはできなかった。オランダにおけるデカルト哲学の台頭のもとで、医師のロデウィク・マイエル (Lodewijk Meyer (Meijer), 1629-1681) による『聖書の解釈者としての哲学』(Philosophia S. Scripturæ interpres) が現れ、聖書の哲学的な解釈の是非が議論されるようになると、彼は厳しい批判を加えた⁸⁾。

余談ではあるが、コメニウスの著作が近世日本に流入したという記録が見出されない一方で、彼の論敵ともいべきマイエルは、日本の蘭学と洋学の発展に大きな影響を与えた人物であるという皮肉な事実がある。

翻訳者あるいは辞書編集者でもあったマイエルは、1650年にヨハン・ホフマン (Johan Hofman) の *Nederlandsche woordenschat* を編纂・出版したが、1669年出版の第5版からは *L. Meijers woordenschat* と題されるようになり、同書は1805年までに12版が現れた [ミヒエル 2018: 46]。日本に流入した同書の各種の版は各所に現存しているが、同書の重要性を認識した中津藩主・奥平昌隆 (1781-1855) は、1822年、マイエルの辞書をもとに7,249語からなる蘭和辞書『バスタールド辞書』(*Bastaardt Woordenboek*) の出版を実現した。

話を戻すと、コメニウスは、三位一体説、予定説、キリストによる贖罪、原罪、キリストの神性といったキリスト教諸派で広く受け入れら

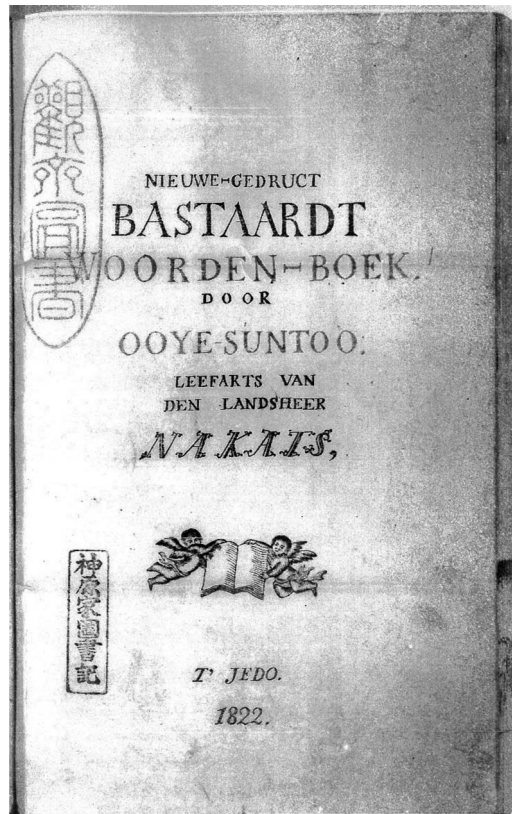


写真2 『バスタールド辞書』表紙
(香川大学図書館神原文庫蔵)

れている教義を否定するソツツイーニ派にはとくに厳しい態度をとった。晩年のオランダでの数年は、ポーランド兄弟教団の神学者ダニエル・ツヴィッカー(Daniel Zwicker, 1612-1678)との間の論争に費やされている⁹⁾。ポーランド兄弟団は、1647年、ヴワディスワフ4世によってポーランド地域の学校と印刷所の閉鎖を命じられている。

オランダの経済優先主義への批判は、この時代に広く見られたものだった。それはアジアへの海洋進出においてオランダと覇を競っていたイギリスでも見られた。作家のジョナサン・スウィフト(Jonathan Swift, 1667-1745)の『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver's Travels*, 1726年初版, 1735年完全版)の第3編第11章には、日本を訪れたガリヴァーが、オランダ人商人であると偽った一方で、踏み絵の免除を願い出たという記述がある。スウィフトは、それを聞いた日本の皇帝が、オランダ人でそのような願い出をした者は初めてであることに驚き、ガリヴァーが本当にオランダ人であるかどうかを疑い始め、キリスト教徒なのではないかと考えたこと記している[スウィフト 2013: 229]。これは当時のオランダ商人が踏み絵という行為に尻込みせず、信仰よりも経済を優先したという認識に基づく痛烈な皮肉であると見なされる。さらに、その下りに関しては、「イギリス人による一般的な反オランダ表象ではなく、またもちろん、スウィフトの反オランダ的意図による創作でもなく、むしろ、オランダ人自身の「そんなことで尻込み」しない自国民の勇気を讃えた記述をそのままなぞる形」[原田等 2013: 396]の記述であるという解釈もある。

そして、コメニウスが、経済的に成功したオランダ商人の庇護のもとにあったのは事実である。彼の主要なパトロンであったルイ・ド・イエール(Louis De Geer, 1587-1652)は、商家として同じく有力であったトリップ一族と縁

戚関係にあり、三十年戦争で武器の需要が高まると、オランダの武器貿易を独占し、オランダやスウェーデンのみならず、あとから三十年戦争に加わったフランスにも武器を供給した[玉木 2009: 71-75]。彼は、スウェーデンのアフリカ進出にも大きく関与し、爵位も得た。1641年にイギリスを訪問したものの、内戦の勃発のためにそこを去らなければならなくなったコメニウスは、スウェーデンの庇護のもとで教授学研究に携わったが、それはド・イエールの仲介によるものだった。そして晩年をアムステルダムで過ごすことができたのも、ド・イエール家をはじめとした富裕な市民たちの保護によるものだった。

オランダが通商とキリスト教の布教を区別したのは事実であり、コメニウスはそれを批判している。しかし、オランダがキリスト教国であることを江戸幕府が明確に認識し、厳しい対応をとっていたこと看過すべきではない。松井洋子は次のように記している。

「1640年、貿易再興を願うマカオからの使節に対して、ポルトガル人全員を処刑し、乗船を焼却するという措置を取ったあと、幕府は報復を警戒し、沿海防備体制を一層強化させました。ポルトガル人追放の時点で、オランダがこれからどう扱われるのかは、全く明らかではありませんでした。幕府はオランダ人もキリスト教徒であることを充分認識していました。

島原・天草の一揆の際、オランダ人は、商館長自らがオランダ船を回航して、一揆勢のこもる城への攻撃に加わり、幕府に奉仕しました。しかし、オランダ人が見せた西洋の大砲の威力は、警戒を招くものでもありました。また、城に籠った一揆勢の頑強な抵抗にてこずった幕府にとって、オランダ人たちが平戸に建造した、新築の頑丈な石造りの倉庫は、要塞としても使えるものに見えたでしょう。幕府が恐れていたのは、国内の反対勢力と外国との同盟であり、

同じキリスト教徒であるオランダ人にも厳しい監視の目が向けられました。

1640年11月、将軍は新たな使者を平戸商館に送り、商館の倉庫の取り壊しと、商館長の毎年交代を命じました。取壊しの口実になったのは、洋風の建物の入り口の上に書かれたキリスト教年記でした。あらゆる形での信仰の表明が、厳しく禁じられたのです。〔松井 2018: 275-276〕

宗門改役としてキリスト教禁教政策の中心にいた惣目付の井上政重 (1585-1661) から平戸商館の取り壊しの命を受けたのは前述のカロンであったが、『平戸オランダ商館日記』からは、その命令がいかに厳しいものであったかがうかがわれる〔永積 2000: 279-280〕。しかし、長い日本滞在経験をとおして日本人の気質を把握していたカロンは、「将軍が我々に命令したことに、すべて正確に従うだろう」と答え、井上は、「私がキリシタンの国を多く扱って来た時のように、彼らはなにか要求したり、願ったり、訴えるだろう、と思っていた。しかしこれが行われなかったので、多くの困難と流血を免れた」と平戸藩士に語ったという〔同: 280〕。命令に従わなかった場合は、ポルトガル人と同様にオランダ人も殺害された可能性もあり、幕府にはオランダとの断絶という選択肢もあった。日本とオランダの通商が維持されたのは、実は「沈着な行動」〔同: 281〕をとることができたカロンという人物の個人的な資質によるところが大きかったのかもしれない。

さて、ラテン語がヨーロッパの知識界における共通語としての地位を保っていた最後の時期であったことを反映して、コメニウスの著したラテン語とさまざまなヨーロッパ諸語の対訳教科書は、彼の著作のうちで最も普及した。そこからすると、日本におけるコメニウス受容をさかのぼるにあたっては、やはりこれらの著作の有無に焦点を当てるのが有効だろう。また、そ

の著作の日本への流入は、非暴力的な手段による段階的なキリスト教的感化を思い描いていたであろうコメニウスにとっても、望むところであっただろう。

鎖国以前におけるラテン語学習の盛況

いわゆる16世紀半ばの鉄砲伝来、キリスト教の布教から、1639年の南蛮 (ポルトガル) 船入港禁止による鎖国の完成に至るほぼ1世紀の間、西洋の文物は日本に盛んに流入した。イエズス会士の宗教的熱情に負う部分が大きかったが、その受容のレベルはかなりのものであった。

1581年には、織田信長 (1534-1582) の庇護のもと、安土 (現、近江八幡市) に三階建のセミナリヨ (神学校) が開設された。翌1582年には、天正少年使節がローマに派遣されている。16世紀中には、府内 (現、大分市) のコレジオや有馬 (現、南島原市) のセミナリヨで日本語ポルトガル辞書が編纂され、1593年には、ラテン語、ポルトガル語、日本語の対訳辞書も現れた¹⁰⁾。そして、1603年から1604年にかけて、収録語数約32,000に及ぶ日本語ポルトガル語辞典『日葡辞書』が長崎で発行された¹¹⁾。この事実、当時の日本において宗教教育を主たる目的としたラテン語ポルトガル語学習のニーズがあったことを示している。そして、数は多くなかったものの、遠藤周作 (1923-1996) の小説『沈黙』でとりあげられた荒木トマス (?-1646) のように、優れたラテン語作文を残した者もいた〔渡邊 2013: 74-77〕。

ところで、日本におけるコメニウス受容とは直接には関係しないが、決して無縁とは言えない興味を引く問題がある。それは、アイルランド生まれのイエズス会士ウィリアム・ベイズ (ラテン語表記では Batheus, William Bathe, 1564-1614) の著作が日本に流入していなかったのかということである。ベイズは、アイルランドの富裕な家に生まれ、音楽や法律を学び、



写真3 安土（現、近江八幡市）のセミナリヨ趾
（筆者撮影）

エリザベス1世 (Elizabeth I, 1533-1603) とも会見したが、聖職を志し、スペインのサラマンカでアイルランド人教団を指導した。彼が1611年に著した『言語の扉』(*Janua linguarum*) は、語学教科書として大きな評判を呼び、いくつかの言語に翻訳されて普及した [Mathuna 1986]。コメニウスがベイズの教科書に批判的考察を加えて編纂し、ベイズの教科書をはるかに上回る評判を得たのが、その名も『開かれた言語の扉』であった。

ベイズの『言語の扉』が著された翌年、日本では江戸幕府領における禁教令が布かれ、1616年には、明朝以外の船の入港はオランダ東インド会社の商館があった長崎の平戸に限られた。



写真4 平戸オランダ商館
(1609年設立の建物の復元、筆者撮影)

ちなみに上智大学キリシタン文庫の創始者ヨハネス・ラウレス (Johannes Laures, 1891-1959) の研究をもとにした上智大学ラウレスキリシタン文庫データベース¹²⁾や17世紀初頭に作成されたマカオの図書館目録¹³⁾を閲覧する限り、ベイズの著作が明治以前に日本に流入したと推定できるような情報は得られなかった。しかし、イエズス会のアジア宣教の拠点となったインドのゴアやマレーシアのマラッカなどに流入していなかったとは言い切れないように思われる。アジア諸国の図書館等の蔵書が横断的に検索できるようになれば、新たな情報が得られるかもしれない。

18世紀前半におけるラテン語学習の困難

17世紀の最初の四半世紀あたりまでは、宗教目的を中心として、日本には一定のラテン語学習のニーズがあった。しかし、その後、キリスト教禁教によって、そのニーズは縮小した。また、西洋知識の導入の例外とされた医学等の実学がオランダ語を中心としたヨーロッパの近代語で出版されるようになれば、やはりラテン語学習のニーズは縮小せざるを得ない。コメニウスがヨーロッパ知識界に登場した1630年代後半以降が、日本人にとってのラテン語教科書の重要性が低下した時期にあっていたのは皮肉なことである。事実、16世紀中に日本語—ラテン語辞書が誕生していたにもかかわらず、18世紀になると、幕府の通詞や医師等の専門家ですらも、ラテン語の読解や意思疎通にかなり難渋することになった。ここでは2例をあげておこう。

1708年、イタリア人ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティ (Giovanni Battista Sidotti, 1668-1714) がキリスト教の布教を目的に屋久島に来訪し、最初は長崎、次いで江戸に移送されて將軍の侍講・新井白石 (1657-1725) も加わった尋問を受けた。このとき通訳にあたったのが大通詞の今村英生 (1671-1736) であった。

今村家は、長崎・平戸の松浦家に仕え、オランダ商館が平戸から長崎に移った際に、英生の祖父の四郎兵衛道安(1617-1673)が町人身分の内通詞となり、以来、多くの通詞が輩出することになった。シドッティへの尋問に関して、オランダ商館の日記には次のような記述がある。

〔1708年12月21日 金曜日

(中略) 大通詞・今村源右衛門Gennemon (引用者注：今村英生)が、彼は前日長い時間例の外国人即ち聖職者paapと話した由で、次のような話を聞かせてくれた。(中略) そこで私はどの様にしてその話を理解したかを尋ねたところ、彼は保管してあったラテン語の辞書Latijnse dictionariumから多くの言葉を予め学習しておいた事と、彼自身ポルトガル語が話せる事に加え、基本的にはその外国人が幾分日本語を解する事で意思の疎通を計ったが、しかし結局その外国人の母国語が何であるかは彼の経験からは分からなかった。(中略)

大通詞・今村源右衛門は閣下方の命により彼(引用者注：シドッティ)にポルトガル語でin't Portugees尋問を開始し、その事はすぐ我々には感知できたが、彼には良く理解出来ない様子であった。上記通詞は他の言葉も交え、質問の内容即ち何処の出身か、名前は、目的は等々尋ねた。彼は幾つかについてラテン語in Latijn, イタリア語Italiaans, ばかりでなく日本語でも答えた。〔今村 2007: 58-59〕

〔1708年12月22日 土曜日

今朝、2人の通詞目付達、乙名達、数人の通詞達が私の部屋を訪れ、次の様に告げた。奉行達の命により大通詞・今村源右衛門Gennemonと2人の稽古通詞(加福喜七郎、品川兵次郎)と更に2人の日本人に我々の商務員補アドリアーン・ダウAdriaen Douwからラテン語を習得^{ママ}したい。その目的で彼等は出島に通い続ける用意があると告げた。その事に我々は反対はしなかったが、我々は、商務員補自身それ程(ラ

テン語が)堪能なわけではない。どの程度お役にたてるか疑問だと述べた。〕〔同 60〕¹⁴⁾

今村英生は、シドッティの尋問にあたった際には、オランダ語のほかにポルトガル語を解していたが、ラテン語は辞書を用いて簡単な意思疎通ができる程度であった。オランダ商館側は、奉行の希望する尋問事項をラテン語で記し、シドッティにラテン語で回答させることを提案している。これはラテン語も交えた尋問に相当の手間がかかったのを見かねたことを示している。

今村英生は、1690年に長崎にきた医師・博物学者エンゲルベルト・ケンペル(Engelbert Kämpfer, ケンプファーと表記すべきかとも思われるが、本稿では一般に通用しているケンペルとする、1651-1716)の通訳を務め、その片腕となってケンペルの日本文物収集を助けた。シドッティの尋問の際に英生が用いたラテン語辞書が何であったのか興味をそそられるところだが、英生の子孫の今村英明氏に照会したところ、ケンペルから贈呈されたか、キリスト教禁教以前に伝わっていたラテン語教科書がキリスト教からの改宗者に伝わっていた可能性もあるとのことであった。宮永孝によれば、『羅葡日辞書』が長崎通詞や幕吏によって秘蔵されていたと想像できる記録がある〔宮永 2004: 40-43〕。また、ケンペルから今村英生に贈呈されたとすれば、それは羅蘭辞書であった可能性が高いだろう。

18世紀前半の日本におけるラテン語理解の困難を伝えるもうひとつのエピソードとしては、スコットランド生まれで主としてポーランドで活動した博物学者ジョン・ヨンストン(John Jonston, ラテン語表記ではJohannes Jonston, 1603-1675年)の『動物図譜』(*Historiae naturalis de quadrupedibus libri, cum aeneis figuris*, 1650-1653)の翻訳をめぐる事例がある。



写真5 ヨーン・ヨンスターン

再び余談になるが、ヨンスターンとコメニウスには浅からぬ関係があった。ヨンスターンは、ポヘミアから亡命したコメニウスが最初に移ったポーランドのレシュノで領主の家庭教師を務め、チェコ兄弟教団とも交流していた。この頃に『自然史提要』(*Enchiridion historiae naturalis*)を著しているが、1657年には同書の英訳が出ている。コメニウスもレシュノで自然科学研究に携わり『自然学綱要』(*Physicae Synopsis*)を著しているが、同書も1651年に英訳が出ている。2人は自然科学的関心を共有し、2人の見解はヨーロッパ的注目を浴びる水準にあった。ヨンスターンは、1632年から1636年にかけてポーランド貴族の子息の遊学に同行していたが、ポーランドに戻ってからはレシュノのアカデミーで教えた。今や初期近代の思想史研究の重要なソースとなっているEarly Modern Letters Onlineにはヨンスターンの書簡が30通登

録されているが、26通はコメニウスのイギリスにおける協働者であるサミュエル・ハートリブ (Samuel Hartlib, 1600-1662)宛であり、コメニウスの書簡のうち4通がヨンスターンに言及している。そこからは、コメニウスが『開かれた言語の扉』を編纂するきっかけになったイエズス会士ベイズの『言語の扉』がヨンスターンによってもたらされたことがわかる [藤田 2005: 49-50]。ヨンスターンの手稿には教授学関係のものもある [藤田 2008: 33-34]。

さて、『動物図譜』の1660年オランダ語版 *Naeukeurige Beschryving Van de Natuur der Viervoetige Dieren, Slangen en Draken* (M. Grausius訳, I. I. Schipper刊)は、1663年4月8日、オランダ商館長ヘンドリック・インディヤック (Hendrick Indijck, 1615-1664)が江戸に参府したおり、4代将軍・徳川家綱 (1641-1680)に献上された [磯崎 1996: 47]。赤色の皮装で書名が金箔押しされた豪華本であったが、50年近く死蔵されることになった(その後、明治になって東京帝国大学図書館に移ったが、関東大震災で焼失)。江戸城の書庫に眠っていた同書に注目したのが、8代将軍・徳川吉

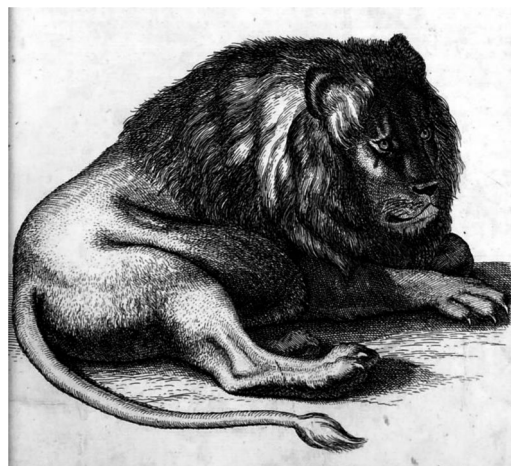


写真6 『動物図譜』(1660年版)よりライオン (大阪市立開平小学校愛日文庫蔵)

宗(1684-1751)だった。吉宗は江戸に参府してきたオランダ商館長に同書を見せ、翻訳可能かどうかを尋ねるほどの関心を示した[同50]。翻訳を命じられた本草学者の野呂元丈(1694-1761)は、オランダ商館長が江戸に参府するたびに質問を繰り返し、多大な労苦の末に『阿蘭陀畜獸虫魚和解』(1741年)をまとめた。しかし、冒頭に、「文字多くは、ラテンの体にして解しかたし」、「羅語とは、ラテン語にて御座候 この体は、文字の書きようオランダと違い候て読かね、又よめ候ても義理通し申し候はず由」(新字体と現代仮名遣いに改めて表記、以下同)[同58-59]とあるように、ラテン語には齒が立たなかったことが告白されている。元丈の手元には同書のラテン語版もあったことが知られるが、「文字皆ラテンの体にして一向解し申さず由申し候」[同59]とも書かれている。元丈は、「この文体は、横文字の通ずる国は何れの国にても学者は通じ候よし、雅言と相聞こえ申し候」[同]と記しているように、ラテン語がヨーロッパの知識界における共通語であったことを知っていた。それだけに、意味がとれないことは無念であったことだろう。

しかし、『動物図譜』は、平賀源内(1728-1780)が家財道具を売って入手した(異説もあり)といわれるほど近世知識人の関心を集め、司馬江漢(1747-1818)や石川大浪(1762-1818)らがその挿絵を模写したように、日本画の技法や題材の発展に影響を与えた。コメニウスの著作が近世日本に流入したという記録が見出されない一方で、彼の親友であるヨンストンは、日本の蘭学と洋学の発展に大きな影響を与えた。マイエルの例とともに、いささか皮肉な事実といえるだろう。

いずれにせよ、コメニウスが語学教育の大家として知られるようになった1630年代から、彼の著書がその異版本を含めて大量に普及した18世紀前半にかけて、日本がラテン語学習の低迷

期であったというのは動かないところである。

近世日本に流入したラテン語書籍をめぐって

文化交流は、日本に限らず、歴史研究の盛んな分野である。日本史は、しばしば、排外と排外を反復してきたといわれるが、戦国時代末期の盛んな西洋受容から一転しての鎖国はドラマティックな変化に富んでいる。そして、鎖国という表向きの政策の一方で、蘭学および洋学の興隆は明治以降の日本の急速な近代化の文化的な揺籃であった。こうして、日本における西洋受容の一側面としての洋書の流入については繰り返し研究がなされてきた。

日本に流入した洋書は、言うまでもなく各所に散在している。たとえば、出島の通詞(通訳)たちがオランダ人から学ぶために取り寄せたものを蘭学に惹かれた大名(蘭癖大名)が購入したり、洋書の輸入制限が緩和されて以降、蘭学者・洋学者が入手したりしたものが、今に伝わっている。もっとも、書物はしばしば散逸し、目録に載らなかったり、目録に含まれていても現在は行方不明だったりすることも少なくない。近代においても、洋書輸入を担った丸善が1909年と1923年の関東大震災と2度の大きな



写真7 平戸市の松浦史料博物館
(筆者撮影)

火災に見舞われ、多くの洋書や目録を焼失している。そうした事例は過去にいくつもあっただろう。

国立国会図書館や基幹的な大学図書館ばかりに目が行きがちだが、地方図書館や高等学校あるいは小学校にも稀覯書が収蔵されていることがある。平戸藩の9代藩主・松浦静山（1760-1841）のコレクションが松浦史料博物館に伝わっているのは有名だが、京都府立福知山高校には福知山藩主・朽木昌綱（1750-1802）の収蔵品が所蔵されているし、大阪市立開平小学校には大坂（大阪）の町人学者・山片蟠桃（1748-1821）の蔵書が保存されているが、これは明治になってその子孫が小学校設立のために土地・家屋とともに蟠桃の蔵書を寄贈し、愛日小学校に保存されていたのが、学校の統廃合で移設されたものである。

日本に流入したオランダをはじめとするヨーロッパの書籍の代表的な目録としては、江戸期のものとしては、紅葉山文庫の書物奉行を務めた近藤守重（重蔵あるいは正斎、1771-1829）による『好書故事』があり、巻第七十九から巻八十一には「蘭書」がリストアップされている（巻七十九は蘭書二だが、蘭書一と考えられる

巻七十八は欠けており、また、巻八十二、巻八十三も欠けている）[近藤 1906: 242-259]。現代の包括的な目録としては、『江戸幕府旧蔵蘭書総合目録』（日蘭学会編、日蘭学会学術叢書、江戸時代日蘭文化交流資料集2、1980年）がある。これは、国立国会図書館、静岡県立中央図書館葵文庫、東京外国大学の所蔵本に、東京国立博物館、国立天文台、慶應義塾大学、一橋大学の所蔵書が加えられた目録である。

また、各地に散在している蔵書類の調査としては、英学史・蘭学史研究者の池田哲郎（1902-1985）が、1956年から1963年にかけて『日新医学』に連載した「日本見在蘭書目録」が知られる（京都府立医科大学図書館に所蔵があり、閲覧させていただいた）。池田以降では、『洋学の書誌的研究』（臨川書店、1998年）をはじめとする松田清による精力的な調査研究がある。原田裕司は、日本に流入した34種類59点のラテン語学書について報告している[原田 2001]。

日本に流入した蘭書・洋書についてのもう一方の重要な情報源が、オランダ商館の資料である。

日本とオランダの通商を担ったオランダ東インド会社関連では、『長崎オランダ商館の取引帳簿』（*Negotie Journaal ten Comptoir Nangasackij*）や同社の拠点であるバタヴィア（現、ジャカルタ）からオランダ本国への報告書に代表される膨大な史料がある。山脇悌二郎（1914-没年の調べつかず）は、この取引帳簿を調査し、江戸時代にオランダから流入した図書について報告している。19世紀以前は、医書や世界地図を除けば、書物の輸入はそう多くなく、とくに延宝年間（1673-1681）から18世紀半ばの間はとくに少なかったという。蘭学や洋学の発展の基盤になったピーテル・マーリン（Pietre (Pieter) Marin, 1667-1718）やフランソワ・ハルマ（François Halma, 1653-1722）による辞書の輸

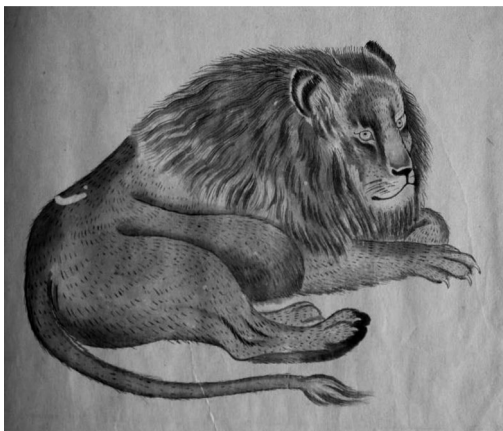


写真8 『動物図譜』の石川大浪による模写より（京都府立福知山高等学校蔵）

入は宝暦年間 (1751-1764) になってからのことで、1754年には、「ラテン語を見出しにして蘭訳した言語辞典一冊」の舶載があったという。[山脇 1980: 91-103]。

また、科学史家のマック・リーン (J. Mac Lean) は、*The Introduction of Books and Scientific Instruments into Japan, 1712-1854* (Japanese Studies in the History of Science, Vol. 13, 1974, pp.9-68.) で、オランダ商館文書にもとづく舶載書籍を紹介している。

以上の先行研究の目録にはコメニウスの著作は含まれていない。主として青少年向けに書かれ、明確なキリスト教的色彩のある彼のラテン語教科書にとって、近世日本の文化的障壁は高かったといえるのかもしれない。とはいえ、彼の著作が流入しなかったと断定することもできない。というのは、歴史研究の進展により新たな史料に光が当てられ、また、いわゆる鎖国体制についての通説的理解とは明らかに異なる事実があるからである。

前者については、たとえば、オランダ商館員の蔵書の存在が注目されている。日本滞在中あるいは渡航前後に死去した商館員の財産目録やその財産が売却された際の目録で現存するものがある。それらを調査した松田清は、「それは当然舶載された洋書全体のごく一部であり、出島にはオランダ商館員の手によって実に多種多様な洋書が数多く舶載されたことが容易に推測できる」[松田 1998: 379] と記している。

後者については、禁教という建て前とは別に、聖書をはじめとしたキリスト教関係書が流入し、一定の影響を与えたという事実がある。上記の松田による調査に限っても、聖書はもちろんコーランまで含まれている [同 373-375]。前述の近藤守重の『好書故事』巻七十四から巻七十七には、キリスト教関係の書物を中心に禁書リストがあるが、禁書であってもその概要を知らなければ問題点を判断できない (巻七十

五、趣意) と書かれている [近藤 1906: 219]。シドッティを尋問した新井白石は、批判的視点を前提にキリスト教の基本教義を理解しようとした。国学者の平田篤胤 (1776-1843) の復古神道は、イエズス会宣教師マテオ・リッチ (Matteo Ricci, 中国名: 利瑪竇, 1552-1610) によるカトリックの教理書に大きな影響を受けている。

近世日本にコメニウスの著作が流入した可能性は高くないが、否定し去ることもできない。史料調査のさらなる進展が期待されるとともに、コメニウスの著作の間接的な影響や状況証拠の有無なども検討の余地があるだろう。

(未完)

[注]

- 1) ゴンザについて注意を促したのは、言語学者の村山七郎 (1908-1995) である。日本の教育学分野でゴンザのエピソードを紹介したのは井ノ口淳三である [井ノ口 1998, 2016]。
- 2) フランソワ・カロン、『日本大王国志』、幸田成友訳、平凡社東洋文庫、2007年。
- 3) モンタヌス、『モンタヌス日本誌』、和田萬吉訳、丙午出版社、1925年。
アーノルド・モンタヌス『モンタヌス「日本誌」英語版』、島田孝右編、柏書房、2004年。
モンタヌスの生涯については、レイニア・ヘッセリンク、「カルヴァン主義思想家、A. モンターヌスの生涯と業績」、有坂隆道編、『日本洋学史の研究』、X、創元社、1991年。
- 4) ペトルス・モンタヌスによる出版物は Short Title Catalogue Netherlands (STCN) では、コメニウスのものをはじめ47点が確認できる。
<http://picarta.nl/xslt/DB=3.11/TTL=>

- 1//REL? PPN = 075538946&COOKIE = U64873,KSTCNLogin,I20,B1996+++++,SY, NSTCN + default + login, D3. 11, E700a5bb8-56b7,A,H,R36.52.165.102,FY
http://picarta.nl/xslt/DB = 3. 11/SET = 1//TTL=1//REL?PPN=075573059
- 5) *Epistula ad Montanum*. in: *Johannis Amos Comenii Opera Omnia / Dilo Jana Amose Komenského*, Sv. 1., Praha: Academia, 1969.
- 6) コメニウス著作の出版に携わったベトルスはecartico:1389, アルノルドゥスの従兄弟のベトルスはecartico:48017に登録されている。
- 7) この問題は、植民地主義およびポスト・コロニアリズムの文脈に関わる。コメニウスは、アムステルダムに移る前に、現在のハンガリー東部にあったトランシルヴァニア公国のシャロシュ・パタクで学校運営にあたったが、それに先立って、『知能の開化についての講話』(*De Cultura ingeniorum Oratio*, 1650.) と題した講演を行い、そこで開化(cultura)と野蛮(barbara)の関係について興味深い持論を展開した。この点は別稿に譲りたい。
- 8) 拙稿, 「コメニウスのデカルト批判再考1—『機械工によって反駁されたデカルト並びにその自然哲学(1659)を中心に—』, 『広島修大論集』, 第62巻第1号, 2021年, 147-165頁。
拙稿, 「コメニウスのデカルト批判再考2—『P.セラリウスの反論についての所見』(1667)を中心に—』, 『佛教大学教育学部学会紀要』, 第21号, 2021年, 1-16頁。
拙訳, 「ヨハネス・コメニウス『P. セラリウスの反論についての所見』(1667) 13~29節」, 『広島修大論集』, 第62巻第2号, 2022年, 101-115頁。
拙訳, 「ヨハネス・コメニウス『P. セラリウスの反論についての所見』(1667) 30~47節」, 『広島修大論集』, 第63巻第1号, 2022年, 111-124頁。
- 9) 高橋康造, 「コメニウスとツヴィッカー その1 ツヴィッカーの経歴」, 『八戸工業大学紀要』, 第28号, 2009年, 41-52頁。
同, 「コメニウスとツヴィッカー その2—コメニウスのソツツイーニ派批判」, 『八戸工業大学紀要』, 第29号, 2010年, 41-52頁。
- 10) 『羅葡日対訳辞書』, 福島邦道他解題, 勉誠社, 1979年。
『羅葡日対訳辞書: フランス学士院本』, 清文堂出版, 2017年。
- 11) 『邦訳 日葡辞書』, 土井忠生, 森田武, 長南実 編訳, 岩波書店, 1995年。
- 12) <https://digital-archives.sophia.ac.jp/laures-kirishitan-bunko/?lang=en> (2022年5月3日閲覧)
- 13) Pierre Humbertclaude, *Recherches sur deux catalogues de Macao (1616 & 1632)*, Biblioteca Nipónica, Fasciculo 3o, Toquio: Sociedade Luso-Nipónica, 1942.
- 14) 今村明恒著, 『蘭学の祖 今村英生』には, 「問答するにあたり, 彼(引用者注, 今村英生)はラテン語辞書の中から, あれかこれかと多くの言葉を拾い選びして綴っているのであったが, 葡語は知っているとのことであつたけれども」[今村 1942: 77] と記されている。

〔引用(参考)文献〕

- Mathuna, Sean P. O. 1986. *William Bathe, S.J., 1564-1614: A Pioneer in Linguistics*, Amsterdam: John Benjamins Pub Co.
コメニウス 1994. 『平和の天使』, 藤田輝夫訳, 『日本のコメニウス』, 第4号, 41-87頁。
コメニウス 2020. 『パンオルトシア 世界会議

- の創設], 太田光一・相馬伸一訳, 東信堂, コメニウス セレクション。
- スウィフト 2013. 『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈 [本文篇]』, 富山太佳夫, 岩波書店。
- フレデリック, クレインス 2020. 『十七世紀のオランダ人が見た日本』, 臨川書店。
- ミヒェル, ヴォルフガング 2018. 『原典対訳・バスタールド辞書』, 中津市歴史民俗資料館〈中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書〉, 17。
- 磯崎康彦 1996. 「ヨーン・ヨンストン著『動物図譜』の舶載と翻訳」, 洋学史研究会『洋学』, 4。
- 井ノ口淳三 1998. 『コメニウス教育学の研究』, ミネルヴァ書房。
- 井ノ口淳三 2016. 『コメニウス「世界図絵」の異版本』, 追手門学院大学出版会。
- 今村明恒 1942. 『蘭学の祖 今村英生』, 朝日新聞社 (朝日新選書4)。
- 今村英明 2007. 『オランダ商館日誌と今村英生・今村明生: 日蘭貿易や洋学の発展に貢献した阿蘭陀通詞の記録』, ブックコム。
- 折田洋晴 2008. 「日本関係洋古書の我が国での受容について」, 『参考書誌研究』, 第68号, 1-8頁。
- 近藤守重 1906. 『好書故事』, 『近藤正齋全集』, 第三, 國書刊行會。
- 玉木俊明 2009. 『近代ヨーロッパの誕生—オランダからイギリスへ』, 講談社選書メチエ。
- 永積洋子 2000. 『平戸オランダ商館日記』, 講談社学術文庫。
- 原田範行, 服部典之, 武田将明 2013. 『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈 [注釈篇]』, 岩波書店。
- 原田裕司 2001. 「前野良沢のラテン語辞典と近世日本輸入ラテン語学書誌」, 『日蘭学会会誌』, 第26巻第1号。
- 藤田輝夫 2005. 「コメニウス小史」, 1, 日本コメニウス研究会『日本のコメニウス』, 第15号。
- 藤田輝夫 2007. 「コメニウス小史」, 3, 日本コメニウス研究会『日本のコメニウス』, 第17号。
- 藤田輝夫 2008. 「コメニウス小史」, 4, 日本コメニウス研究会『日本のコメニウス』, 第18号。
- 松田清 1998. 『洋学の書誌的研究』, 臨川書店。
- 松田洋子 2018. 「江戸時代の日本とオランダ」, 『日本学士院紀要』, 第72巻 特別号。
- 宮永孝 2004. 『日本洋学史: 葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容』, 三修社。
- 山脇悌二郎 1980. 『長崎のオランダ商館』, 中公新書, 579。
- 渡邊顕彦 2013. 「キリシタン時代日本人のラテン語作文にみられる古典受容—ジョルジュ・ロヨラの1587年12月6日付書簡 (ARSI Jap. Sin. 10.II.296) と伊東マンショの1592年12月1日付書簡 (ARSI Jap. Sin. 33.66) を中心に一」, 『東京大学西洋古典学研究室紀要』, 8。

〔付記〕

本稿は、科学研究費補助金・基盤研究 (B) 「教育思想史のメタヒストリー的研究」 (17H02673) による研究成果の一環であり、チェコ共和国ウヘルスキー・プロトのコメニウス博物館誌 *Studia Comeniana et historica* に投稿した拙稿 *Between the Three Books of God and the Three Talents: On the Acceptability of Pansophy in Early Modern Japan* の前半部分を日本の先行研究を踏まえて加筆したものである。貴重な蔵書の掲載を許可していただいた香川大学図書館、大阪市立開平小学校、京都府立福知山高等学校のご厚意に深謝申し上げる。

(そうま しんいち 教育学科)

Abstract

Japan's Encounter with the Works of Comenius
—Dating Back to the Episode before Gonza—

Shinichi SOHMA

The encounter between the Czech 17th-century thinker Johannes Amos Comenius and the Japanese is so far believed to be the first time the drifter Gonza translated the textbooks of Comenius in Russia in the former half of the 18th century. This paper reports on a survey of pre-Gonza episodes. Whilst the works of Comenius' friend, John Jonston and Comenius' opponent, Lodewijk Meyer were able to be accepted in Japan, and made favorable contributions to the development of Dutch and Western learnings, any new records before Gonza's have not been found. This might suggest the cultural barrier in early-modern Japan was steep for Comenian texts to overcome. Whilst expected the development of the investigation on the unearthed materials, it is necessary to consider circumstantial evidences and indirect effects relating to Comenius' texts.

